

笠原紀久恵の教育実践記録の研究(2-1)

——『先生が好き 学校が好き——子どもの数だけ
豊かさがある』の検討——

広瀬 信

An Inquiry into the Documentary Literature of Educational
Practice by KASAHARA Kikue (2-1)

——An Inquiry into *Sensei Ga Suki Gakkou Ga Suki*——

Shin HIROSE

E-mail : hirose@edu.u-toyama.ac.jp

キーワード：教育実践記録 教育実践研究

keywords : documentary literature of educational practice, study of educational practice

はじめに

本稿では、前稿¹⁾に続き、1998年に出版された笠原紀久恵の実践記録『先生が好き 学校が好き——子どもの数だけ豊かさがある』(国土社)を取り上げて、教師や教育の在り方を検討する。

1. 笠原実践の概要と特徴

(1) 『先生が好き 学校が好き』の概要

前稿で取り上げた『友がいて ぼくがある——学びあい、育ちあう40人の学級物語』(一光社)が、1979年4月～1981年3月(39～41歳)までの2年間担任した苦小牧市立東小学校5～6年生との実践記録であったのに対して、本書には、1985年4月～1987年3月(45～47歳)の2年間担任した苦小牧市立日新小学校1～2年生との実践記録として「子どもの物語」と「仲間が好き、自然が好き、遊びが好き」の2編が、1991年4月～1993年3月(51～53歳)の2年間担任した苦小牧市立大成小学校3～4年生との実践記録として「輝く三十五人の子どもたち」が収められている。

1) 「子どもの物語」

「子どもの物語」は、苦小牧市立日新小学校で最初に担任した一年生との出会いから始まって、

その中でも一番小さい手をした、泣き虫の勇一^{ゆういち}に焦点を当てて、その成長を描いている。よく泣き、よく転ぶ勇一は、転んでも転んでも、みんなと一緒によくてグラウンドを駆け回る。クラスの仲間やそのお母さんたちからも応援を受けて、なかなか跳べなかった縄跳びにも、引っかかっても引っかかっても挑戦し、ついに64回をやり遂げ、逆にその直向きさが周りの子どもたちに感動を与えていく。

初めは字を書かなかった勇一だが、縄跳びをやり遂げて、その思いを長い日記に書く。また、学校では世話をしてもらった方が多かった勇一だが、家庭ではやさしいお兄ちゃんとして妹の世話をし、お母さんから頼りにされてたくましくなっていく。周りのいろいろな人に見守られながら、泣き虫の勇一がたくましく成長を遂げていく物語である。

2) 「仲間が好き、自然が好き、遊びが好き」

「仲間が好き、自然が好き、遊びが好き」では、同じクラスのとびきり元気のいい一介^{かずすけ}に焦点を当てて、その成長を描いている。元気が良すぎて、学校の枠に収まらない一介は、親愛の情から、仲間を突き飛ばしたり、ポカリと一発お見舞いしたりして、クラスのお母さん方から「武勇伝の子」と言われていた。恐縮する一介のお母さんに、笠

原は、「私は一介くんの今が好きですよ」とその元気さややさしさ、好奇心旺盛なところをほめ、「いい聞き役であってください」とアドバイスした。一介には日記を書くことを勧め、一介は好きな生き物のことや遊びの楽しさを喜んで書くようになっていった。「勉強はぼくの敵だ。遊びたい」と詩に書いた一介が、しっかり受け止めてくれる両親の愛情を受けてのびのびと育ち、やがて絵本や児童書も楽しむようになり、読書感想文で次々と賞を取るような子に成長していく物語である。

3) 「輝く三十五人の子どもたち」

「輝く三十五人の子どもたち」は、苫小牧市立大成小学校で3～4年を担任した35人の子どもたちを取り上げている。その中で、「お友だちのいいところをいっぱい見つけて」という笠原の最初の呼びかけに、「いいことなんか、あるわけないべ」と言い返した浩介が、仲間とともに育とうとするように変わっていく過程、引き継ぎの書類に、「学校では、無表情で口をきかない暗い子です」と短く記されていた有理が、笠原の呼びかけに応じて日記で思いをいっぱい語りだし、それに共感した子どもたちから受け入れられ、やがて自ら立候補して美化委員になっていく過程、「勉強いやだもん。字、めんどくさい」と言っていた光が、やがて、朝自習のノートに漢字を書いたり、短い文を書いたりするようになり、クラスの学習の雰囲気の上昇に刺激されて徹夜でノート一冊を漢字で埋めてきたりするようになる過程、音楽のリコーダーの授業にはまったくついていけなかった光や浩介が、上手な直人から放課後に個別指導を受けて、やがてリコーダーを楽しめるようになり、仲間のお誕生会やお別れ会でリコーダーの美しい音色をプレゼントするまでになる過程、国語の時間になると極度に緊張し、本を読むときは涙をこぼした勝由や、「漢字が大嫌いだから国語が嫌い」と言っていた富之が、図書室での図書学習の中で「漢字の書き方」の絵に興味を持ち始め、やがて部首博士になり、それに刺激されてクラスに漢字探偵団が12作られ、探偵団対抗部首カルタ合戦などが展開されていく過程、体重が重く、あまり運動が得意でない高嗣が、「無理するんじゃない」と止める笠原の心配をよそに、マラソン大会に出場し、ゴールの1メートル手前で

力尽きて倒れてしまうが、自分の存在をかけて立ち上がり、一足、一足、大地を踏みしめるようにしてゴールインするドラマ、そのドラマに見入っていた、本のあまり好きではない祐二が、後に『トベないホタル』に出会い、「あの時のことが思い出されて、オレなんだか別の人になったみたい」に体が熱くなった」と言っていた感想文などに焦点が当てられている。

(2) 教育信条・教育姿勢・教育目標

前稿で取り上げた『友がいて ぼくがある——学びあい、育ちあう40人の学級物語』（一光社）は、個々の子どもの成長に焦点を当てつつも、学級集団を育てる、「学びあい、育ちあう40人の学級物語」でもあった。全国生活指導研究協議会（全生研）の学級集団づくりの手法も採用し、月目標の達成に向けての取り組みを組織するなど、子どもたちを集団の関わりの中で育てるための働きかけも意識的に行っていた²⁾。それに対して、本書では、副題の「子どもの数だけ豊かさがある」や、前書きの「いろんな子どもがいるから楽しい」に象徴されるように、笠原の視線は、かけがえのない一人ひとりの子どもに向けられており、全生研的手法による学級集団づくりのための意識的働きかけは見られない。

一人ひとりの子どもに目を向けることの大切さは前書でも強調されており、「あとがき」で、若かった頃、「情熱いっぱいの体当たり教師」として、子どもたちを引っ張っていくような実践をしていたが、ある時ふとふり返ってみた時、「教室の隅で、淋しそうな目をしてわたしを見ていた無口なあの子は何を語りたかったのかと思ってみても、その声は聞こえてこない」ことに気づき、「わたしは大切な何かを見落としてきていたのではないだろうか。『子どもに学びながら』といいつつも、教育を、教える者の側からみてきていたのではないだろうか。だから、どうしても見えも聞こえもしない部分があった」のではないかと悩んだ³⁾と述べていた。そして、その頃、仲間の先生方との学習会で、「子どもの内的事実」にふれて子どもを捉える」こと、「自分の中で力にならない限り、生きる力にならない」ことを学んだ⁴⁾ ことによって、若い頃の、「情熱いっぱい」の、どちらかと言えば教師主導で、子どもたちを強引に引っ張っていくような教育姿勢から、一人ひとりの子どもの「内的事実」にいていねいに目を向けていき、

子どもの内面的育ちを見守り、励まし、自ら花ひらいていく時を待つという教育姿勢へと転換したのであった。

このような教育姿勢は、本書でも維持されているが、本稿で取り上げる実践の時期には、さらに「一人ひとりみんな違いがある」(36頁)(笠原紀久恵『先生が好き 学校が好き——子どもの数だけ豊かさがある』国土社、1998年の頁数。以下同じ。), 「一人ひとりみんな違っていいんだ」(88頁)ということについての思いを強くしていったようである。

「集団づくり」よりも「個に向き合おう」という姿勢を強めていたことをうかがわせる出来事が、これらの実践の直後に書かれた文章に紹介されている。一つは、雑誌で目にしたある母親の、「先生にとっては、集団かも知れないけれども、親や子にとっては、クラスは一つの集団ではない。好きでも嫌いでもなく、ただ与えられた“場”にすぎない。子どもにとって大事なことは、クラスがどうまとまるかではなく、自分の“居場所”をできるだけ早く確保することではないだろうか。(略)それは親にとっても似たようなことで、できるだけ早く自分の子がクラスの中で平安でいられる位置を確保してほしいということになる」という文章で、笠原はこれを、「痛切な親の思いであり、私も今の教育の根のところでこれは大事にされなければならないことだと思って読んだ」⁵⁾と述べている。

もう一つは、ある研究会で、大勢の人が感心して書き写していた教室目標(①何事にも挑戦しようとするチャレンジ精神、②クラスや班のためにがんばる——ひとりのなまけ・いたづらが、みんなにめいわくをかける、など7項目)で、その時、「私が子どもだったら、この教室では暮らしていけない」⁶⁾と思った述べている。

そして、それらを踏まえた当時の考えとして、「私たち教師は『みんなのためになるんだ』『みんなそろって』という思いから、いいクラス作りをめざすことがある。そのとき、目の前にいる子どもたちがみんな同じ子どもであると思いきんではないだろうか。目標にどうしても応えられない子、ついつい悪戯をしてしまう子(悪戯をしなければ生きていけないような心の苦しみを、もしかしたら抱えているのかも知れない)。その子をみんなに迷惑をかける子と少しでも思ったら、その子の痛みや辛さへの理解は成り立たなくなり、問題行動の子にしてしま

わないだろうか。……一人ひとりみんな違っていいんだよ。その違いをわかりあい学びあって豊かになっていこうよ、というスタートを切りたいと、私はいつも思う」⁷⁾と述べている。

成育過程の諸困難が深まる中で、様々な痛みや辛さを抱える子どもたちが増え、身体的にも、知的にも、社会性の面でも多様化し、従来の学級集団づくりの枠からはみ出る子どもが現れ、共通の目標の達成を目指すことで学級集団の力を高めていくという手法を採ることが困難になり、無理にそのようなやり方を続けると、その枠から外れる子どもが排除され、「問題行動の子」にされてしまうことになりかねないと考えようになったものと思われる。

そのため、前書には見られた、月目標の達成に向けての取り組みを組織するなど、全生研の意味での、子どもたちを集団の関わりの中で育てるための働きかけは止め、「一人ひとりみんな違っていいんだよ。その違いをわかりあい学びあって豊かになっていこうよ」を、新たな学級づくりの教育目標とするようになったのだと思われる⁸⁾。もっとも、この教育目標は、一人ひとりの違いを前提に、「どんな人だって、人間らしく生きたいという願いを持っているんだということ、見たり、聞きとったり、感じとったりできる目や耳や心を子どもの中に育てたい」という、前稿で確認した笠原の教育目標とも通じており、教育目標が大きく転換したわけではない。

「世界に一つしかない個性的存在である子どもが心のうちを見せてくれるのを待つ」⁹⁾というのが、当時の笠原の教育姿勢であったが、教育の個別主義には向かわず、「人間は仲間なしには生きていけない存在であること」を重視し、「いろんなことがここでは仲間にも教師にも、そして親たちにも共感してもらえと思えるようになると、それぞれの子のいろんな芽が顔をだし育っていく」¹⁰⁾と考え、クラスの仲間や親たちに、困難を抱える子どもの「個性」(よさ)を分かってもらうための努力、言い換えると、その子にとっての「居場所」づくりを重視することになる。「『一人ひとりそれぞれ個性がある』……、その『個性』にその子が胸をはって生きるように援助しなくてはいけない」¹¹⁾という時の「援助」には、そのような努力が重要な内容として位置付けていたと考えられる。

同じ頃、笠原の「児童観」に影響を与えた(189頁)出会いがあった。前著の5・6年生のクラスを

卒業させた直後、41歳の頃、笠原は同じ苫小牧市立東小学校で初めて1年生を担当している。ちょうどその頃、高校生になった卒業生が修学旅行のお土産を届けにくるような、「子どもたちが慕いつづける」渡辺正校長先生に出会っている。

渡辺先生は、「『この学校は何をしてもいいよ。伸び伸び活動しなさい』と両の手を広げて活動の場を保障し、一人ひとりの発達のドラマを楽しんでいるよう」(190頁)な先生で、どんな子からも慕われていた。

「八百人を超す全校生徒を固有名詞で語る」先生で、「『子どもというのは、伸びていく生命体です。我々はそれを見守りながら、共鳴し合い、時々軌道修正してやったりする。それは大人が生き方のなかで伝えていくことが大事ですね。そして学校は子どもが自分らしく伸びる安心の土壌でなくてはなりませんね』『最近は見守るといふより、私は子どもの姿に感動することが多いです。子どもの宇宙とでもいうのでしょうか。我々の想像を超えた大きさがある。はみ出しているように見える子の発達のエネルギーのなかに大きな可能性が見えますね』こんな話を子どもたちの固有名詞で具体例を示しながら語るから説得力があった」という(204頁)。

笠原は、この渡辺校長先生から、「子どもというのは、伸びていく生命体」であり、「学校は子どもが自分らしく伸びる安心の土壌でなくてはならないことや、「はみ出しているように見える子の発達のエネルギーのなかに大きな可能性」を見ることの大切さを学んだものと思われる。この出会いも、「一人ひとりみんな違っていいんだよ。その違いをわかりあい学びあって豊かになっていこうよ」という笠原のこの時期の教育目標の設定に影響を与えたと思われる。

前稿で確認した、「どんな子も差別されてはならない」「一人ひとりの子に花ひらく時は必ずある」という笠原の教育信条は、本書では、「人が育っていくとき、その子らしさを出せる教室でありたいと思う。しかしその子らしさとは実に多様であり、個性が強ければ強いほど、毎日はダイナミックな展開になっていく。ある程度の見通しを持って懐を広げて受け止めていかないと、みんなと違ったことをする子は問題の子として押さえ込んでしまい、何もないことがいい教室になってしまう。」(124頁)という表現で、「個性が強い子が排除されてはならない」

という点に焦点化されて表明されている。

以上のように、本書では、前書に見られた笠原の教育信条・教育姿勢・教育目標を基本的に引き継ぎつつ、従来の学級としての活動の枠からはみ出る子どもたちもしっかり受け止めることができるようなものにさらに発展させられたと考えられる。

(3) 教育方法

1) 生活綴方教育の方法

笠原の教育方法の中心は、引き続き日記を中心とする生活綴方教育の方法である。1年生の場合は、必ずしもクラスに一律に日記を書くように勧めているわけではなく、子どもに合わせて個別に勧めているようであるが、3年生の場合は、みんなに「日記を書こう。見たこと、聞いたこと、したこと、思ったこと、考えたこと。何でもいいよ。一日の出来事の中で大事にしたいなあと思ったことを書いてみよう」(126頁)と呼びかけている。もちろん、無理に書かせるようなことはしていない。

日記以外に、詩や俳句、川柳など、様々な表現手法が奨励されているが、日々提出される日記帳に書かれることが多かったようである。

提出された日記帳には、赤ペンが入れられた。3・4年生では、毎朝提出する自主学習のノートもあり、こちらにも赤ペンが入れられた。

赤ペンを入れることで、日々、一人ひとりの子どもと個別のコミュニケーションを積み重ねているのである。子どもにとっては、「先生はいつも自分を見守ってくれている」という信頼と安心感につながり、子どもの「がんばろう、自分を高めたいこう」という気持ちを支える役割を果たす¹²⁾。だから、子どもたちはこの赤ペンを楽しみにして、また日記帳を書いてくるのであった。

笠原は、提出された日記の中で、クラスのみならず親と共有したいものは、毎日発行する¹³⁾学級物語(学級通信)に載せて、クラスで読んで聞かせ、家庭へ届けている。学級物語は、笠原の日記のようなもので、子ども達のように学級のできごとが克明に書かれ、笠原の思いが語られる場でもあった。

「一人ひとりみんな違っていいんだよ。その違いをわかりあい学びあって豊かになっていこうよ」という笠原のこの時期の教育目標とも関わっ

て、様々な困難や問題を抱えた子どもの良い面、本当の姿をクラスの仲間や親に紹介するための媒体として学級物語が意識的に活用されているのもこの時期の特徴である。

例えば、「学校では、無表情で口をきかない暗い子」、「緘黙児」と見られていた有理が、笠原の呼びかけに応じて、クラスで最初に日記帳を提出してきた時、コメントをつけて学級物語で紹介している。

三年生になったとき、わたしは三年二組でした。お友だちがいっぱいできそうでした。三年二組から見ると、きれいでした。新しい一年生が入ってきて、わたしはうれしかったです。だって、一年生のへやのそうじをしたり、めんどろがみれるからです。家に帰って、おかあさんが、「よかったね」と言ってくれました。三年生になって、よかったと思いました。

「今年はお友だちがいっぱいできるぞ」と、みんなと楽しそうに遊んでいる様子を思いえがいて書いたんだね。そう思って教室から外を見ると、きれいな春の景色が広がって見える。心も弾んでるようだと思ってる。まだうれしいことがある。それは一年生が入学してくる！私はもうおねえちゃんだから、いっぱいめんどろ見るぞと思う。もう心がわくわくする。そんな気持ちで家に帰ると、おかあさんも有理ちゃんのうれしげな様子に「よかったね」と声をかけてくれる。なんていい一時なんだろう。このとき、有理ちゃんの希望は大きくふくらんだに違いない。いつも、控えめにしている静かな有理ちゃん。周りのみんながキャッキョとはしゃぎ自己主張しても、伏せ目がちに黙って座っている有理ちゃん。でも心の中はこんなに大きくふくらんで、三年生の希望でいっぱいなんだ！

きっとこれから、有理ちゃんのカが春の木の芽のようにぶっくりふくらみ、ぐんぐん伸びてくるに違いない。それが楽しみです。(126-128頁)

このように、日記、赤ペン、学級物語によって行われる生活綴方教育が、引きつづき笠原の教育

方法の中心であった。

2) 学級づくりの方法

前書では、全生研的な「学級集団づくり」の手法を併用していたが、本書の実践記録にはそのような手法は見られなくなっている。引きつづき学級をいくつかの班に編成したり、「係」、「委員」、「部」などを作り、立候補制で委員などを決めたり、学級会で話し合い、仲間の問題行動を「追求」したりもしているが、「班長会」、「リーダー」、「学級(月)目標」「学級総会決定」などの言葉は出てこない。上述したように、この時期には、「集団づくり」よりも「個に向き合おう」という姿勢を強めたため、また、高学年ではなく、低・中学年の子どもの対象とした実践であったこともあって¹⁴⁾、笠原は、月目標の達成に向けての取り組みを組織するなどの全生研的集団づくりの手法を使うのを止めていた。

それに代えて、「一人ひとりみんな違っていいんだよ。その違いをわかりあい学びあって豊かになっていこうよ」という考え方で学級づくりを進めようとした。

2. 笠原実践の分析 1

(1) 「子どもの物語」

1) 1年生との出会い

1985年4月(45歳)、笠原は、苫小牧市立日新小学校に転勤して最初に1年生を担当している。最初の出会いの思いを次のように述べている。

「好奇心いっぱいの子、すまし顔に、またどこか心細げに肩を落として座っている子もいる。この子たちはみんな、学校という大きな建物と大勢の人の中にたった一人でやって来て歩き始めるわけである。ここにいる私にすべてを託そうというのだ。／誕生して六年。その歩みの中にはいろいろなことがあったに違いない。そのすべてを受け止めていけたら、それぞれの芽が安心して育つだろう。それぞれの持ち味が教室の中でいい影響を与え合い、みんなが安心して生活できる教室にしたいと思った」(7-8頁)。

それぞれに違う子どもたちが「安心して育つ」ことができるように、「そのすべてを受け止めていこう」というところに笠原の教育姿勢が、「それ

ぞれの持ち味が教室の中でいい影響を与え合い、みんなが安心して生活できる教室にしたい」というところに笠原の教育目標が現れている。

入学式を前に、笠原は入学してくる子どもたちの気持ちに思いをはせる。「何日も、何ヶ月も前から、『一年生になる』ことに夢をふくらませ、ある子は指折り数えてこの日を待ったに違いない。／おじいちゃん、おばあちゃんから贈られたランドセルを何回も背負って部屋を歩き回った子もいるだろう。突然の転居で見知らぬ町での第一歩の子もいるだろう。楽しみにしていた我が子の入学式を見ることもなく、病に勝てず心を残しながら逝ったお母さんの『友だちをたくさんつくって、元気で大きくなるのよ』との願いを小さな胸に抱いてやって来た子もいる。／さまざまな思いや願いを、小さな体に背負ってやって来る子どもたち。未知の世界へのドキドキ、好奇心や不安で胸はいっぱいに違いない。」そして、近年の入学式の日々の日程が、「型どおり」に、「短い時間の中で」行われることを問題視した上で、「この時こそゆとりある時にできないものか。一人ひとりの手を両手に包み込んで、何か一言声をかけ、『あなたを待っていたのよ』という思いを伝えたい」（8頁）と自分の思いを述べる。

笠原は、一年生を迎える準備として、次の3つのことを行っている。①事前に届けられている実態調査票に目を通して、あらかじめ一人ひとりの子どもについての知識を仕入れておく。上記の、病気で母を亡くした子の情報もそのようにして得たものと思われる。次に、その知識を踏まえて、②入学式に間に合うように、どの子にも「にゅうがくおめでとう」にひと言添えたはがきを出しておく。最後に、③机の上の名札を見ながら、前日までに一人ひとりの座席をそらんじておく。その際、子どもの名前を声に出して言い、子どもの顔を思い描いたり、名前に込められた親の思いを考えてたりしてみる（8-9頁）。

そして、入学式当日には、「朝の教室で、握手をして、……その手の語る物語をしっかりと聞き取りたい……私自身の手に……記憶させたい」（9頁）と考え、一人ひとりと握手しながら一声かけていく。

笠原の手紙に返事をくれた^{たかあき}貴明とは、「先生、お手紙ありがとう」

「貴明くん、いっぱい遊ぼうね。学校は体育館も大きいし、お友だちがたくさんいるよ」

「はい」

と言葉を交わし、「この素直さを大事に育てたい」と考えている。

入学式前に母を亡くした^{あきら}光とは、

「光くんは、お父さんと一緒だね」

「なしてわかる」

「うーん。だって、さっきから後ろを見て手を振っていたじゃない」

「そうか。ぼく、お兄ちゃんいるよ」

と言葉を交わし、「ゾウのようなやさしい目元、手が温かい。大丈夫だ、この子は明日から教室を駆け回るだろう」と考え、「お母さん、安心してくださいね。光くんは強い子です」と、亡くなったお母さんに心の中で伝えている。

元気な一介の手を握り、「もうその手が踊りだしている」「たくさん遊んだがっちりした手の厚さだ」と感じた笠原は、力強く、ギュッと握り返して、

「一介くんか。強そうな名前だね。今度、相撲しようか」

「マジ？」

「ほんとさあ」

「ピース！」

と言葉を交わした。その時、一介は、「ぱっと目に輝きが増して、後ろにいるお母さんを振り返りながら、アハアハ笑い続け」た。

「身じろぎもしないでまっすぐ前を向いて座っていい」だが、ブルーのランドセルを背負って、「しっかりした個性豊かな子のよう」に見えたあゆみとは、

「あゆみちゃんは、何が好きですか」

「あのね、お花と駆けっことお勉強」

「たくさんお友だちつくろうね」

と言葉を交わしたところ、あゆみは、「はい」と言って、「ぺこりと頭を下げてフーと大きく深呼吸した。」

^{ゆうこ}優子は、

「優子ちゃん、やさしい子だね、きっと」

と声をかけたところ、

「優子、やさしくないの。おねえちゃんにキックとパンチもするよ」

の一言で、教室中の笑いを取ってしまった。

「お人形さんのように色白できゃしゃな手」を差し出した亜子は、

「亜子はね、本が好き」

と言った。笠原は、その手が「愛しいと思って両方の手に包んで握手」した。

「さっきまで泣いていた」勇一は、「教室で一番小さい手」を笠原にゆだねて、「寂しげに」座っていた。

「勇ちゃん、いい名前だね。きっと強い子になるんだ。明日から元気においでね。先生待ってるよ」と言うと、

「うん」

とうなずいた。「勇くん、泣きたい時はいっぱい泣いていいんだよ」と、笠原は、心で語りかけていた。

「握手が終わるころ、教室の中にほっとした雰囲気気が漂ったという。笠原と一年生の子どもたちとの「最初の一步」はこうして始まった(11-14頁)。

このように、笠原は、事前に子どものことについて詳しく調べ、顔や名前や座席を覚え、歓迎のメッセージも送った上で新入生を迎えるようにしており、入学式当日には、一人ひとりと順番に握手し、その表情や手の感触から子どもの個性を読み取りながら、子どもに合わせた言葉かけをして、「安心していいんだよ」というメッセージを送っている。

2) 泣き虫の勇一

「教室で一番小さい手」の勇一は、1180グラムの未熟児として生まれ、医師から命を危ぶまれながら保育器で三か月過ごし、ようやく退院したと思ったとたん今度は肺炎になり、再び長期入院をしたという。その後も「数々のつらい体験」をした後、今のお母さんの下にやってきたそうだが、今のお母さんはそれ以上は詳しく知らないそうである(17頁)。

よく泣く子で、消しゴムを落とすただけで「ウーン」と泣いた。周りの子が、「一年生はそんなことで泣いたら、だめなんだよ」、「自分のことは自分でしなさいってお母さんいったよ」などと言うが、笠原は、「そうか、お母さんに買ってもらった大事な消しゴムだったんだ」と受け止めて、拾ってやる(15頁)。「こうでなければなら

ない」という見方ではなく、あるがままを受容しながら、子どものことを理解しようという姿勢である。

ランドセルを背負うと、「足元がおぼつかない感じになる」(17頁)ほど、きゃしゃな体つきで、駆けっこをしても「十メートルを駆ける間に五回くらい」転んでは泣いた。あゆみや小雪に、「勇ちゃん、男でしょ。泣いちゃだめ」と言われながら助け起こしてもらい、手を引いてもらってゴールインした。しかし、「転んでも転んでも、みんなと一緒によくて」、勇一はグラウンドを駆け回った(15頁)。

6月の運動会でも何度も転んだ。それでも「ぼくさ、走るの好きになったよ」と、勇一はマラソンの練習をした。笠原は、その「ひたすらな真面目さ」に心を打たれ、やがて、勇一のそのような個性が、周りの子どもたちにも影響を与えるに違いないと考えた(15-16頁)。

勇一が泣くと真っ先に駆けつける伸と泰成の様子を見ていて、笠原は、二人が、「泣くな、笑われるよ」と口では言いながら、「いいなあ、あんなふう泣けて」というような目をしているのに気付いた。

そこで、

「勇くんの元気のいい泣き方は、伸ちゃんや泰ちゃんの大笑いと同じくらい好きだなあ」

と言うと、

「泣いてもいいの」

「マジ？」

と不思議そうに聞いてくる。

「いいさあ、泣いたり、笑ったり。そしてみんな元気よく」

と言うと、どの子も安心という表情になった(16-17頁)という。

このように、笠原が勇一をありのままに受け入れる姿勢を示すと、周りの子どもたちも勇一をありのままに受け入れるようになっていくのである。

3) 勇一のスタート

学習面でも、当初、勇一はなかなか字には興味を示そうとせず、鉛筆さえ持たずに黙って座っていた(16頁)。ある日、くすくす笑う声に振り向いて見ると、勇一が鼻にも耳にも口にも鉛筆をさして座っていた。普通の教師なら、「ふざけては

ダメ」と叱るところだろうが、笠原はそれを受け止め、

「あれえっ、勇ちゃん。それなあに」

とたずねる。勇一は、

「バッファローマン」

と答える。

笠原は、いままで「鉛筆さえも握ろうとせず、いつも宙を見るような目で座っていた勇一が、初めて自分で工夫した仕事だ」と見て、勇一の中に内面的な意欲（発達の要求）が現れてきたと見て取るのだ。

「勇ちゃん、バッファローマンは、誰と一緒に見るの」

とたずねると、勇一は、

「みな子だよ」

と答える。

「へえっ。妹のお世話ができるんだね。どれこの手でいい子いい子してあげるの」

と言うと、勇一はうなずいた（17頁）。

笠原は、こうして、「妹のお世話ができる」勇一を新たに発見し、そのことをほめている。それに「うなずいて」反応する勇一を見て、笠原は、「今にきつと字だって書くようになる。書きたいと思うようにしたい」と思いながら、

「勇くんの爪、めんこいね。この爪の形、ほうらこうやってなぞったら、なあんだ」

とたずねると、のぞき込んだ優子が、

「勇ちゃん、つめのつだよ」

言うのを聞いて、勇一は、

「チュメ」

と、指をなめながら大きく「つ」を書いた。勇一が初めて字を書いた「スタートの時」だった（18頁）。

このように、笠原は、子どもの内面的な意欲（発達の要求）の現れをていねいに読み取り、そのチャンスを逃さず、ていねいに働きかけ、子どもの変化を引き出している。次の出来事にも勇一の発達の要求を引き出す笠原のていねいな対応が見られる。

ある日の放課後、誰もいない教室で、笠原は、子どもたちのノートに目を通しながら、はみ出した椅子や落とし物の鉛筆が物語る子どもたちの日中の様子を思い浮かべる時間を楽しんでいた。そこに勇一が顔をのぞかせ、

「せんせ、まだかいんないの」

と聞くので、

「そう、お仕事しているの」

と答えると、

「せんせ、早くかいんないと先生のお母さんが心配するよ。勇一手伝ってやるから一緒に帰ろう」という。そこで、

「そうか、うれしいなあ。じゃあ、みんなの机を拭こうか」

と共同作業を提案すると、

「うん、ぼく、掃除好きだよ」

とっていっしょに拭いてくれた。拭きながら、

「勇ちゃん、学校は楽しい」

「面白いよ。勇一、友だちいるもん。^{のぞむ}望でしよう。女子でしよう。いっぱいだよ」

「よかった、勇ちゃん学校好きで」

「先生は」

「先生も、大好き。かわいい勇ちゃんや元気のいい子や忘れん坊や、いたずらっ子やいっぱいいるから」

「光、おかしかったね」

「あっ、そうだ。そうだ。先生がやっつけられたもんね」

と会話を交わす。

勇一がクラスの仲間に受け入れられており、本人も学校が好きで、楽しんでいることが分かる。「先生がやっつけられた」というのは、花びんに飾ってあったチューリップをだれかが落として折って、折れたまままたさしてあったのを見て、笠原が叱ったところ、折れて首を垂れたように見えるチューリップを指さして、光が、「チューリップがごめんなさいしている」と言ったことを指す。笠原はこれには「参った」と言っている。勇一も光のユーモアを楽しんでいたのだ。笠原は、「子どもたちも日常のこうした何気ないやりとりの中から大事なことを吸収してもの見方を学んだり、仲間を知っていたりするのだろう」と、子どもが仲間との関わりの中で育つことを確認している（18-20頁）。

机拭きが終わって、笠原といっしょに雑巾を洗う勇一を見て、笠原は、「1180グラムの未熟児だった子が、こんなに元気に手伝える子に六年の歳月は育ててくれた」、「小学校生活は六年もある。そして、今まで以上に豊かな人間的触れ合いがある

に違いない。勇一の自分の世界を広げたいという発達の要求は、『掃除、手伝うよ』に始まって、どんどん出てくるに違いない。それをしっかりとらえ、応えていくだけの力を私は身に付けたい」(20頁)と自分に言い聞かせている。

4) 勇一の飛躍

勇一の歩みは、「ほかの子たちのスピードに比べると、それはゆったりしたもの」で、「まるで前進なんかしていないよう」であった。縄跳びでも、「ほとんどの子が連続百回をこえ五百を超えて跳び続ける中で、勇一は十回がやっとだった」が、やる気を失うことはなく、「引っかかっても、引っかかっても、縄を忘れることはなかった」(21頁)という。

9月のある日、勇一が、「疲れた」と、その場にしゃがみこんでいたので、他の上手な子の跳んでいるようすに笠原が見とれていたとき、

「いやあ、もう！」

と勇一が叫び、縄を叩きつけた。

「勇ちゃんだって練習しな。そしたら上手になれるよ」

と小雪が励ましているのを聞いて、笠原は、勇一の「いやあ、もう！」という激しい叫びに、「もっと跳べるようになりたい」という勇一の「内なる要求」を読み取った。それまでは、子どもたちとともに、「勇ちゃんには勇ちゃんらしくと」、やさしく、見守るように接してきた笠原は、今こそ「もっと跳べるようになりたい」という勇一の要求を後押しする時だと判断し、この日は、

「勇ちゃん、五十回跳ぼう。今日、跳ぼう」

と勇一に挑戦すべき目標を提示した。周りの子どもたちは「先生、無理だよ」という目で見えていたが、勇一は、

「うん」

と言って進み出て、五十回への挑戦を始めた。何十回も引っかかっても止めず、「汗にまみれ、シャツも脱ぎ、裸になって」頑張った。やがて、「その勇一を見ている子どもたちの雰囲気が変わり始めた。」「息をつめたような静寂」が広がり、子どもたちは、勇一の跳んだ数を「数える合唱」を始めた。

四十九回までいったとき、興奮は最高潮に達し、涙ぐむ子どもも現れた。

「すごい、勇一」

「勇ちゃん、やったね」

と拍手が鳴り、子どもたちの間に「先生、よかったね」という雰囲気が広がった。

しかし、勇一は、

「だめ。一回足りない。目当てまでやる」

と言って、再び挑戦を始めた。

それから、また何十回も引っかかって、転んでは立ち上がり、ついに五十回を超えた時、「勇一の跳び続ける音と、子どもたちの五十、五十一、五十二と数える声だけが響いていた」(21-23頁)という。

勇一の「内なる要求」の高まりを見逃さず、挑戦すべき目標を提示して、勇一の意欲を引き出し、目標の達成へと導いた笠原の判断が光る。

この事件をきっかけに、子どもたちの勇一を見る目が変わった。子どもたちは、「ゆうちゃんはすごいです」とか、「ゆういちくんがこんなえらいひととはしりませんでした」と日記に書いた。それまで日記が嫌いだった耕二も次のように書いた。

ゆうちゃんは、なわとび五十かいもこえてがんばったね。いっぱい ひっかかったけど、いっかいも やすまないですごかったね。ぼくはゆうちゃんをみていてなきそうになりました。ゆうちゃんは五十かいをとんだあとないていました。せんせいもなきそうなかおをしていました。(23頁)

勇一も初めて次のような長い文を書いた。仲間の励ましに支えられて頑張れたことがうまく表現されている。

ぼくは はじめ十五かいしかとべませんでした。そのときくやしかったです。せんせいがたいくのかえり「ゆう一、とぼう」といいました。ぼくは、そのときがんばるかなあとおもいました。なんどとんでもひっかかってばかりでした。みんなが一、二、っていいました。だからぼくはひっかかっても、ひっかかっても五十までとぼうとしました。でも四十九が一ばんでした。でもまだちからがあるきがしました。みんな「がんばれ」とゆってくれました。でも、

なんかいもつかかったけど、がんばって五十こえました。みんなが手をたたいてくれました。せんせいがだっこしました。ゆう一はきょう一ばんうれしかったです。おとうさんとのおむくんのおばさんにもおしえてあげたいです。(23-24頁)

この文を読んで、笠原は、「勇一の喜びの報告者にお母さんはまだ登場しない。けれど、仲間の中で豊かに育っていく心は、今にお母さんの喜びにもなるに違いない」(24頁)と考えていた。翌日の朝の会で、いつものように日直が、「何かいいことはありませんか」と言ったとたん、勇一が「はい、はい」と言って立ち上がり、「勇一。これもらった。望くんのおばさんからもらった」と、いつも勇一のことを心に止めていてくれる、望くんのおばさんからの手紙を差し出した。

勇一くん。なわとびががんばったね。足がつかれても、つかかっても、あきらめないでとんだね。勇一くんがなわとびでがんばったとき、おばさんもいっしょにとびたかったです。力がなくなるまで、あきらめないでとんでいた勇一くんを見ていたかったです。がんばったねということばよりもっともっと、すごくてうれしいことばをさがしたけど、みつからなかったから「がんばったね。勇一くん」(25頁)

学級物語を読んで、「私、涙が出て。なんか勇ちゃんも教室の子どもたちも愛しくなって、お手紙書いて望にもたせたんです」と、望くんのお母さんが後日語ってくれたという(26頁)。

勇一は、五十回を超えて六十四回も跳び、さらに自信を付けるようになった。泰成と祐造が、「ぼくも跳ぶから見てて」と言って跳び始めたが、二人はジョークが大好きで、いつもみんなを笑わせてばかりいるため、周りの応援団も笑ったりおしゃべりをし始めた。その時、勇一が、「静かにすれ。やっちとゆうぞう、跳んでるべ」と大きな声で言ったものだから、みんなは驚いて「尊敬の目」で勇一を見つめた。自分の一生懸命の努力を仲間を受け止めてもらった勇一は、仲間

の努力もしっかり受け止めることができるようになったのである。

一連の勇一の新しい変化を念頭に、笠原は、「遅々としてみえる歩みを、『のんびりしている』、『いつやる気を起こすのだろうか』などと、マイナスにのみとらえては決して発見することのできない芽が、そこにもここにもあるんだと一年生が私に教えてくれた」(26-27頁)と述べている。標準的な達成目標を基準に子どもを見ていては見えない子どもの姿を笠原はていねいに読み取っているのだ。「ゆういちくんがこんなえらいひととはしりませんでした」という仲間の言葉や望君のお母さんからの手紙は、子どもたちや保護者にもそのような人間の見方が浸透していていることを示している。

5) 家庭での勇一

学校での勇一は、「どこか幼さを残し、世話をしてもらうことの多い子」であった。しかし、家庭では「しっかりしたお兄ちゃん」だった。笠原は、夕暮れの道で小さい子の手を引いている勇一によく出会い、声をかけている。

「勇一くんでしょう。あれ、妹と遊んでいたの」「はい。今、帰るところ。先生、今何時」「もうすぐ六時。お母さん待ってるよ」「うん、みな子と遊んでやってたら、犬が来たんだ。したからね、守ってやったんだ」(27頁)。

勇一の日記にも妹がよく登場するようになった。

きのう、ぼくが日記をかいているとき、いもうとが「あそぼ」といいました。ぼくは、いもうとと、こうえんに行きました。犬がいきました。ぼくは犬をなぜなぜしました。犬がなめました。いもうとが「おっかない」といいました。ぼくは「いいから さわってごらん」といいました。いもうとがさわりました。犬はいもうとがきにしたのかいもうとのそばにちかよってきました。いもうとがしゃがみました。犬がいもうとをなめました。(28頁)

笠原はこの日記を学級物語に掲載し、次のように書き添えている。

いいな。妹をいたわるやさしい兄。日記をかい

ているそばに小さい妹がいて「ゆうちゃんあそば」って言って寄ってくる。勇ちゃんは決していやな顔一つせず「いいよ」と妹の手を引いて公園にいったのだろう。犬を見つけて、妹を連れてそのそばに行き、なぜなぜする勇ちゃん。犬にも勇ちゃんのやさしさが伝わったのか、おとなしくしている。でも、みな子ちゃんが「おっかない」と言うので、「大丈夫。ほら」となでて見せる頼りになるお兄ちゃん。「さわってごらん。ちっともこわくないから」と妹の手を取ってさわらせてあげたのだろう。こんな温かい、のどかな兄妹の風景は、いつのころからか私たちの前から消えつつあった。私は勇ちゃんの日記を読みながら、とてもいいものを見ているような気持ちになりました。勇ちゃんの妹への思いの温かさが私の気持ちも温かくしてくれる。やさしさも教えてくれる。こんな妹思いのお兄ちゃんがいる、お母さん助かるだろうなあ。お母さんはきっと勇ちゃんをあてにし、頼りにしているだろうなあ。(28-29頁)

この学級物語を読んでもらったクラスの仲間たちは、学校では「世話をしてもらふことの多い」勇一が持つ、「しっかりしたお兄ちゃん」、妹にやさしいお兄ちゃんという、別の側面を知ることになる。

お母さんから次のような手紙が届いた。「……今日の学級物語、楽しくまたうれしく拝見させていただきました。いつのまにか勇一もよいお兄ちゃんになったなあという思いでいっぱいです。うちに来たころは、しつけはだめ、勉強もだめというような子どもでしたが、私の知らないうちに、すっかり大人になりました。妹の面倒もよくみてくれ、用事を頼んでもよくしてくれ、本当に気持ちのやさしい子です。……中略……百点満点のお母さんではないけどがんばります。……」(29頁)。

お母さんの目にも、入学以降の勇一の成長ぶりはめざましく、今では勇一を頼りにするようになっていくことが分かる。笠原は、「人にあてにされ、期待されている子の成長はたくましい」と、家庭でお兄ちゃんとして頼りにされるようになったことが、勇一の更なる成長を促していると感じている。勇一も、「ひとりでできることが増えたし、妹の

世話も忙しい」と話してくれるようになったという(29頁)。

6) 2年生になった勇一

参観日の懇談で、「いくら言っても起きない」、「起きてても、ごはん食べさせるのに一苦労します」などの悩みが出され、「子どものころだけさ、朝は水で顔を洗ったじゃない」という望のお母さんの発言がきっかけで、「子どものころは川で顔を洗ったって記憶がある」、「この地域、いい川があるし、日曜日の朝だけでも、夏場は七時に川に入れて足だけでもつけてみるのってどう」と盛り上がり、学校近くの神社の境内で日曜日の「朝遊び」が始まったという。遊びが終わった後、お母さんたちが交代で本の読み聞かせも始めた。笠原の学級物語がクラスの子どもや親をつないだせいか、このクラスではこのような「共同の子育て」の取り組みが生まれている。

そのうち更に「朝マラソン」もしようということになった。笠原も途中から仲間入りし、「朝マラソン」は2年になっても続いていた。勇一もメンバーの一人で、「たくましい足取り」で2.5キロほどを走った。日記に次のように書いている。

ぼくは、六時に神社に行って、朝早く走っています。朝は、きもちいいです。もうおばさんたちがきていました。ぼくは「おはよう」とでかい声でいう。そのとき神社で鳥がなきます。ぼくは「たいようにむかって走るぞ」と心にいう。そして、かみさまに「きょうもよろしく」という。そして、みやの森に走って行く。のぞむくんにまけないぞと思って走る。かぜが「がんばれ、がんばれ」とおしえてくれるから。足がかるくなる。(31頁)

ここには、入学時の「泣き虫の勇一」の姿はもうない。笠原は、勇一の走る姿に、「自己発達の意欲」を見る。「我が子とともに育つ仲間」にそそぐお母さんたちの熱い眼差しが意欲を支え続けることも教えられた(31頁)とも語る。笠原の学級物語のおかげで、自分の子どものクラスメートの様子もよく知っているお母さんたちが、「我が子とともに育つ仲間」にも「熱い眼差し」を注いでくれたことが、勇一の意欲を支え続けることに

なったのである。

七月二十五日、勇一は、みんなからのスピーチとお母さんたちによる「読み聞かせ」で、八歳の誕生会を祝ってもらった。

笠原は、その日の学級物語に次のような勇一へのお祝いの言葉を載せ、勇一が、両親だけでなく、クラスの仲間のおばあさんやお母さんなどにも温かく見守られて成長してきたことを伝えている。

なんでもがんばる勇一くん 八歳おめでとう！
「勇ちゃんがめんこくてさ」

わたなべまことくんのおばあちゃんが「さよなら」にきた日、勇ちゃんを抱きしめて泣いていた。

「勇ちゃんは『おばさん、足もう治ったの』って、やさしくしてくれるんです」

いそがいくんのお母さんも勇ちゃんのやさしさを語っていた。

「勇ちゃん六十四回もとんでおめでとう。おばさんもみたかった。すごだね。」

手紙をくれたのは、望君のお母さん。

勇ちゃんのやさしさと、人としての温かさ、明るさ。そしてなにより、真剣さは大人の人の心もしっかりとらえる。一年生のとき、転んでばかりいた勇ちゃんが、サッカーのボールを追ってどこまでも走る。面倒を見てもらうほうだった勇ちゃんが妹の手を引いて、確かな足どりで歩く。

流し場をあらい、床を磨き、「勇一、こういうの好き」という。

勇一くん、八歳だね。おめでとう。

八歳の少年剣士はますます強くなるに違いない。剣道の防具がよく似合い始めたよ。

勇ちゃん。ノートもがんばれ。

知くんのように、続けてがんばれ。

そして心と賢さと勇ちゃんの誰にも負けない素直な真面目さを宝にして大きく育て！

お父さんは「大きくなれ、人に役立つ勇気の人になれと勇一と名づけた」と話していた。

勇ちゃん。お母さんも「妹にやさしくてうれしい」と言っていたよ。(32-33頁)

この文を見ながらにこにこしている勇一にクラスの仲間が拍手を贈るのをみて、笠原は、「祝い

合える安心の場の中で子どもたちは、自分らしい顔をして歩いていく」と述べている。「一人ひとりみんな違っていいんだよ。その違いをわかりあい学びあって豊かになっていこうよ」という笠原の教育目標が達成されているのを確認できる。

(2) 「仲間が好き、自然が好き、遊びが好き」

1) いろんな子がいるからいい

次に焦点が当てられているのは、勇一と同じクラスの「とびきり元気のいい一年生」(36頁)、一介である。

笠原は、教師の会話でよく出る「今年は、いい子が揃って」とか「大変なのがいるから」とかいような子どもの見方を批判して、「私たちは『一人ひとりを大事にした教育をする』という。それは、『人間、一人ひとり、みんな違いがある』ことを根底にした考えでなくてはならないと思う。……一人ひとりみんな違いがあるのだから、『みんな違って見える目』を持って出会いのときを持ちたいものである。『いろいろな子がいるからいい』というスタートを切りたいと思う」(35-36頁)と述べる。

一介は、そんな笠原でも驚くほどの、「学校という小さな枠の中には納まり切らないエネルギーが体の中に渦巻いているよう」(36頁)な子だった。「集団下校でみんなが整列しても虫を追って走ったり、親愛の情のつもりで『オイ』と体をさわったら、突き飛ばすことになってしまったりする。ちょっと離れたところの子が落とした消しゴムも、音と一緒に体が反応して取りにいこうとして椅子ごとひっくり返り、渡すときには『ちゃんとしれ』と、ポカリと一発お見舞いして泣かせてしまったりもする」ので、「落ち着きのない子」、「元気過ぎる子」というマイナスイメージで見られていた(36頁)。

初めての参観日の日も、「後ろの席の子の頭を筆箱でポカリ」とやり、「武勇伝の子はあの子ね」と注目を浴び、一介のお母さんはショックを受けて顔を覆ってうつむいていた。お母さんは、「ほとんどの子が椅子にきちんと腰をかけ、いい子であるのに、我が子だけ違うことの不安」から、懇談の場で、

「先生、ショックです。落ち着きのない子とは思っていましたが、こんなんだとは。どうしてみなさ

んと同じことができないのか。……先が思いやられます」

と発言した。それに対して、笠原は、
「私は一介くんの今が好きですよ……あの元気はエネルギーですよ。そして明るさがいい。素直なものいい。教室中の子をみんな好いているみたいですよ。どの子にもスキンシップしていますよ……一介くんは、人間も草も木も生きものも、みんな好きなんだろうなあと思いますよ。きっと愛しまれて育てられてきたんでしょね。みんな仲間だと思っているんですよ」(36-37頁)

と、一介の個性を評価した。そして、他のお母さんたちに向かって、

「今にみんなも一介くんのエネルギーが欲しくなります。教室って、いろいろな子がいるからいいんです。影響し合って、響き合って、子どもたちは、栄養たっぷりに育つんだと思うんです。お母さんたち、教室の子みんな好きになってくださいね。お母さんが好きになると、子どもたちも仲良しになりますよ」(38頁)と、「いろいろな子がいるからいい」という笠原の持論を語りかけた。

「そんなこと言われてもね」というような表情の人たちもいたようだが、笠原は、「学校でどの子も大事にされていると感じてもらえば、今にきっと我が子とともに育つ仲間が愛しく思うようになってもらえるだろう」と考えていた。そして、
「教室の子どもたちが見える学級物語をお届けしようと思います。物語ふうにかきたいので、学級物語『ゆめ』とします。よろしく願います」(38頁)と締めくくった。

一介は、何かにつけて、「教室の空気を活気づける役割」を果たす子であった。

クラスで「好きなもの」の発表会をした時、いろいろな発言に続いて、「お勉強です」という発言が出たのを聞いて、一介が、「びっくり仰天という目をして」、

「おまえ、それ、まじ。カズはラジコンで遊ぶことだよ。ラジコン、ぶーん」

と実演して見せると、とたんに教室の空気が「子どもの空間」に変わった(38頁)。

初めての給食の時間、一介が、
「おい、パンにたれつけてみれ」
と、ハンバーグのケチャップをパンにつけておいしそうに食べていたら、クラスの子どもがまねて、

「本当、おいしい」

「うめえ」

と、声があがり、教室に「食事を楽しむ雰囲気」が広がった(39頁)。

ある日、一人の子が足元を見つめて立ちつくしていたところ、

「あっ、しょんべんだ」

などと、周りの子どもがひやかしたので、その子は泣きそうになった。それを見て、一介が、

「言うな。そんなこと。誰だって、しょんべんするっしょ。カズなんかおねしょしたことあるよ」というと、どっと笑い声が起り、泣きかけた子も笑っていた。笠原は、「一介は、人の気持ちをごく自然に感じ取り、我が思いも出せる子だった」と、そのやさしい一面を評価している(39頁)。

明記されていないが、このような教室の情景を学級物語で家庭へも届け、「教室って、いろいろな子がいるからいいんです。影響し合って、響き合って、子どもたちは、栄養たっぷりに育つんだと思うんです。お母さんたち、教室の子みんな好きになってくださいね」というメッセージを送り続けたのではないかと思われる。

4月10日、最初に7歳を迎えた能登孝^{の とたかし}くんの誕生会を行い、お祝いのカードを渡すとともに、お母さんからの手紙をみんなの前で読んでいます。それを聞いた一介は、「おまえ、ションベンかけたの」と笑いながら、「きかん坊でもいいから」というところが自分と同じだと、目に涙をため、「カズも生まれたとき、うちの父ちゃんすごく喜んで、近所に寿司くばったんだって」と言った。これを見て、笠原は、一介は「人の思いをピンピンと体中で感じ取れる子なのだ」と読み取っている(40-41頁)。

2) 家庭訪問で親と語る

春の家庭訪問が始まった。笠原は、「どの家を訪れるときも土産話は持って行きたい」と考えていた。一介の場合、「心なごむエピソード」はたくさんあった。引用が続くが、一介のお母さんとのやりとりを再現する。

「先生。今日は何を言われてもいいです。迷惑かけているでしょう」

と、お母さんは身構えるが、

「いいえ。元気はいいし、やさしいし」

と笠原は肯定的評価を送る。

「やさしいだなんて？」

「本当ですよ。この間もね。『五月四日は開校記念日って学校のお誕生日です。日新小学校は十三歳になります。みんなはお休みです。家でおめでとうって思っあげてね』と言ったんですよ。そうしたらたいいの子が『知っているよ』と言いました。その時、小森くんが、『お誕生日か、じゃあぼく花束持ってお祝いにこなくっちゃあ』と言ったんです。そうしたら一介くんが、『花のあるところ教えてやるぞ』と言いましてね。本当にうれしかった」

と、笠原は、具体的エピソードを紹介する。

「外でばっかり遊んでいるから」(41頁)

と、お母さんはまだ否定的評価から離れられない。「その共感するところ、明るさが何とも楽しいじゃありませんか。子どもらしくていいです。私は気に入っています。遊び過ぎるというのは仲間がいっぱいいる証拠ですし、身体の中で勉強のもとを吸収しているんだから、今にそれが生きてきます。一介くんの個性を大事にしましょうよ」

と、笠原は、一介の良い面、個性を語る。

「でも、何かみんなと違い過ぎるのは恥ずかしいです。同じように落ち着いてくれたらとそればかり思います」

と、お母さんは、みんなと同じでないことへの不安からまだ逃れられない。

「この前もね。お母さんの友だちの家に行って犬にさわったら、めんこかったと教えてくれたとき、落ち着いて、いい目をして『めんこいなあ』と思った気持ちのまま話してくれましたよ」

と、笠原は、また別のエピソードを紹介する。

「そんなふうに見てもらえたら、本当にうれしいです。先生、こんなんでも家の宝息子です」

と、ついに親の本当の思いが語られる。お母さんは涙ぐんで次のような話をしてくれた。

「一介は、パパと、いや私たち夫婦だけじゃなく親戚中で待ち望んでいた男の子でした。……3580グラムで大きな声で泣いて生まれてきました。親戚には男の子がいなかったので、みなにそれは喜ばれてこの世に来ました。家にはお姉ちゃんが二人いたの、もし男の子が生まれたら金太郎さんのような子にしたい。元気でやさしい方がいいなって夢見ていました。誕生に歓喜したのもつかの間、

大事件がありました。三歳の秋、腸重積症になり、生死の境をさまよいました。病院の先生が『もう大丈夫ですよ』と一介を抱いて処置室から出て来たときは、主人と『健康だったらもうそれだけでいい』と泣きました。元気よく遊んでくれたらと願ったのです。そうしたら遊びだけがうまくなっちゃって」(42頁)。

このように生い立ちを語りながら、

「心の中ではあの子らしく、伸びやかに育てたいと思っているのです」

としみじみと語ってくれた。

笠原は、心の中ではこのように思いながらも、学校では「みんなと同じであってほしい」、「学校の基準の中で普通であれ」と親に思わせてしまう「現在の学校教育のあり方が問われている」と述べている。

「一介くんは、毎日何かを見つけてくるでしょう。行動範囲も広いし、ものを見るときのあのパッチリした目がいい。感動しきっているし、カズの友だちだと言っているみたいで、私は好きです。いいものを持って育っていますよ。お母さんはそれを楽しむ視点でいい聞き役であってください」

と、笠原は、一介の個性の良い面をさらに説明し、その良さを伸ばすためにも、「聞き役」として楽しんでほしいと、お母さんに子どもとの接し方のアドバイスをしている。

「そんなんでいいのでしょうか。迷惑ばかりかけるのではないのでしょうか。もっといい子にしないと」

とお母さんはまだ不安げだが、

「迷惑なもんですか。あの元気で明るさは、子どもそのものです。今にみんなもいい影響を受け始めますよ。お母さん。一介くんの友だちをみんな好きになってくださいね」

と、笠原はさらに説得する。

「先生はどの子もみんないい子だとおっしゃるけれど、どうしたらそう思えるのでしょうか」

と、お母さんは不思議そうにたずねる。

「だって、まだ地球にやって来て六年しかたっていないこの一年生が、虫を友だちと言ったり、こんな花見つけたよと、まるで春を握って走って来たような表情を見たら感激するし、私にはないものをいっぱい持っていて、私なんかかなわないなあって思うこと、しょっちゅうです」

と、笠原は自分の感動を伝える。

「そうか、そんなふうに思えばいいんですね」(43頁)と、お母さんもようやく自分を納得させる。

このように、笠原は、家庭訪問での親との対話を大切にしている。そこで、「子どもたちのよさ」を話題にする。すると、どんなに我が子のことを否定的に語る親でも、「本当はこんないいところもある」、「こんな夢を描いている」という話を聞かせてくれる。「子どもを愛しているからこそ言える」そのような「話に耳を傾けていると、学校の教師の子ども理解なんかの及ぶところではないと思うことがしばしばである」という。親は子ども理解を深める重要な情報源であり、笠原が伝える子どもの学校での様子も共有してもらいながら、ともに子ども理解を深め合い、その子を育てるパートナーとしての協力関係を深めているのだ。

3) 日記の世界に誘う

笠原のクラスでは、朝の会を、日直が、「何かいいことはありませんか」と言って始めるのが日課であった。一斉に手があがる中、どうしても知らせたい一介は、椅子の上に立ち上がって「ハイ」と叫ぶ。一介の「いいこと」は、「ケムシやネコやカエルとの格闘など」で、生き物との関わりを生き生きと描写した(44頁)。

そんな一介に、笠原は、
「一介くん。日記を書いてみよう」と提案する。「勉強は好きじゃないという一介は、机の前にじっとしているのがいやなだけで、毎日自然の絵本から吸収している知識や知恵に」笠原はいつも圧倒されていたという。

「勉強すんの」
「一介くんの話が楽しいから、書いておくと思ってるさ」
「短くてもいい」
「いいさあ」
「じゃあ、カズ書いて先生に見せてやる」
「ああ、きっとお母さんもお父さんも喜ぶと思う。ワクワクするね」(44-45頁)。

こんなやりとりで、一介の日記帳は生まれ、「伸びやかに自分を出してぐいぐい書き始め」、「いつしか自分を見つめる目も育てていった。」一介に日記を書くことを促した要因について、笠原

は、「書いたらそれを読むのを楽しみにしてくれる人がいる」と、「いい読み手、聞き役の存在」(45頁)を挙げている。それは、まずは笠原であった。そして、お母さんやお父さん、また、クラスの仲間や保護者たちに広がっていく。

あのね、先生。うさぎをもらいました。さんぼをしました。でもなかなかはやくあるかなかったです。ぼくのいえには三びきいます。(五月)

「うさぎのさんぼをしました。なかなかはやくあるかなかった」。ここはいいね。たのしいねえ。かずすけくんが「あるけ」といってもうごかなくて、こまっているようすがかけてるもの。うさぎをもらって、うれしくて、さっそくさんぼさせてやろうとしたのに、おいしいたんぼぼのそばで、むしゃむしゃたべたり、きよろきよろよそみしたりね。「おねがい。いこう」といっても、しらんぷりしたり、うさぎらしいね。かずすけくんもきつと、まってあげたんだね。うさぎが三びきもいていいね。なにがすきか、こんどしらべておいてね。あかねちゃんのうちには、こねこが三びきいてね、「うし」「うま」「りす」というなまえなんだって。かずすけくんのうさぎはなんていうの。(筆者)(45頁)

情景を思い浮かべながら書かれた、本人の文章の何倍もの笠原の赤ペンを読んで、一介は、「先生。散歩するの見てたの。だって、そのとおりだもん」と目をパチパチさせて言ったという(46頁)。

笠原は、一介の次の文章に長いコメントを付けて学級物語に載せ、紹介している。コメントは、保護者に読んでもらうことを念頭に、「身体中でつかんでいく学習」の大切さについての笠原の考えを、それを身に付けている子どもとそうでない子どもの様子を描きながら伝えている。これは、一介の「お母さんにたくましく育つことの安心感を与えたようだ」(47頁)とされている。

あのね、せんせい。ぼくは、どろんこあそびはおもしろいです。どろでけえきをつくりました。またやりたいです。いろんなこともしました。(五月)

水曜日の図工は、どろんこに絵を書いたり、どろを使って動物やケーキや山を作ったりしました。初めは、くつが汚れたらママに叱られるからとはじのほうで絵を書いている子がいました。しかし、一介くんやまことくんたちの面白そうにどろをこねる様子があまりにも楽しそうなので、どんどん裸足になり始めました。ケーキを作って、固めるには乾いた砂を足せばいいことや、どろにするには水を足してよくかき回すことも、身体中で知っていった学習でした。「先生、汚れたシャベルはどうするの」「帽子に土がついたけどどうするの」と何でも「どうするの」となさげそうな顔で聞く子たちに「洗えばいいんでしょう」と、ピシャリと言ったのは、どろんこ大将たちでした。不思議な説得力がありました。身体中でつかんでいく学習を子どもたちにもっともっとさせたいものです。(筆者) (46頁)

一介は、7月には2冊目を終えるくらい、日記帳を「毎日楽しんで書くようになっていた。」その頃、3冊目を終えて、お母さんから表彰状ももらった子どももいた。学級物語に掲載される仲間の作品を楽しむことで、「みんなが書くことを楽しむ」ようになっていった(47-48頁)という。一介はいくつもの作品を書いたが、その中に「にじ」(50-51頁)という作品があった。

にじ
きょう、にじをみました。
あめがやんだとき、にじができました。
一ばんそとはあかです。
二ばんそとはだいたいいろです。
三ばんめにそとはきいろです。
つぎのそとはみどりいろです。
つぎのいろはあおです。
つぎのいろはあいです。
つぎのいろはむらさきです。
ぼくがみたときは、いろんないろがありました。
そのとき、にじにのぼりたかったよ。
にじをみて、じっくりにじのいろをはっけんして、につきにかいたよ。
いろは、あかやむらさきやいろんないろがあって、きれいだとおもいます。

いろがきらきらひかって、きれいだったよ。
ぼくはにじをあるいたり、でんぐりかえしをしたりして、
いろんなあそびをしたいな。
にじはいつもみていたいよ。
むらさきやら、きいろやら、あかやら、
いろんないろがあって、きれいだったよ。
ぼくは、にじのうえで、そらをもっとけんきゅうしたいよ。(9月)

これには、「一生懸命、虹のことを調べる一介の目は、キラキラ輝いていました。母」というお母さんのコメントが添えられていたという。「わが子の新しい面を発見し、ひと言を添えたようだ」(51頁)と笠原は見ている。「読むのを楽しみにしてくれる人」が確実に広がっているのが分かる。この頃、一介は、「おかあさん」という詩を書いて、いいにおいのするお母さんを「たべたくなる」(52頁)と表現していた。ところが、そんなに大好きなお母さんと勉強をめぐって衝突し、次のような大胆不敵な詩を書いた。

べんきょうはぼくのできだ
べんきょうは、だいきらい。
べんきょうなんて、したくない。
べんきょうはぼくのできだ。
ゆうすけくんとあそびたい。(9月) (52頁)

笠原はこれに次のような長いコメントを添えて学級物語に紹介した。

「ぼくのことを大きい人たちはクロマティというんだよ」日に焼けた腕をなでながら一介くんが目をパチクリさせて言う。夏の太陽の恵みを一人でもらったように健康そのものの肌である。

「一介、勉強したの」
「あとで」

大の仲良しのゆうすけくんの家に向かって駆け出す一介くんが見えるような気がする。遊びが大好きで、下校時には何より先に「おまえ、今日遊べる」と聞いて回る。あいにく相手が見つからないと、「先生、今日遊べる」と聞きにくる。「じゃあ、教室で少し遊ぼうか」と言う

と、「ぼくの家の方へ行って遊ぼう」と言う。山あり、川あり、冒険のいっぱいできるところへ行こうと言う。「一介たら、六時になっても帰ってこないことがあるんです。そして、もうごはん食べたらコロンでしょう。勉強どうしようかと思うと……」。お母さんは元気のよさをうれしく思いながらも、やはり学校の勉強を気づかい、「いいの。いいの。一介くんは元気がいいし、第一遊んで時間を忘れるというのは友だちが多い証拠だし、体で勉強のものを吸収しているんだし」「まあ、先生たら！」こんなやりとりもありました。「勉強はぼくの敵だ。遊びたい」このエネルギーがなんとも好きな私です。おとなしかったゆうすけくんが、今では、一介くんとおなじように冒険の楽しみを知った。(筆者)(53-54頁)

このように、笠原は、クラスの保護者を念頭に、自分の子どもの見方、勉強や遊びに対する見方を伝えて、一介の持つエネルギーを高く評価している。

一介は、生き物が大好きで、よく日記にも書いた。大事にしていたくわがたが死んだ時に書いた「むしづか」という詩に、「むしづかにうめた」、「あさくうめた」、「だってはやくてんごくにいけるとおもったから」「ところがしーんとなるくらい、かなしかった」と書いている(54-55頁)。

この詩について、笠原は、一介のお母さんと次のような会話を交わしている。

「お母さん。この話、いいですね。心が温かい。私にはないこのやさしさ、うらやましい」

「そうなの。私もカズを見直したところがあるんです。あの日、一日中元気がなくてふさぎ込んでいました」

「ああ、お母さんもしっしょに寂しがっていたんですね。一介くんは幸せだ」

「先生、こんなところばかりよくても、さっぱり勉強しないから」

「いやあ、人間にとって一番大事なものが育っています。心配ありませんよ」

「あの子、生き物とか自然と触れ合っているとき、我が子ながら、いい顔しているってほれぼれすることがあるんですよ」(56頁)。

笠原との会話を通じて、お母さんも一介の良さ

を受け止め、納得するようになっていっているのが分かる。笠原は、勉強のことを気にするお母さんの気持ちも受け止めながら、「目の前の子たちに学力の基礎はしっかりつけながら、それぞれの子の求める世界を自由に駆け回れるようにするにはどうしたらいいだろうか」(57頁)と悩んでいる。これ以上、議論は展開されていないが、まず基礎学力をつけて、その次に自由な探究をという段階論は採用せず、子どもの意欲に根ざした自由な探究を安心して展開できるように見守り、支えることが、基礎学力の形成にもつながるという考え方を大切にしているのではないかと思われる。一介のお母さんに最後に次のように語りかけている。

「一介の喜びとともに喜び、いい聞き役であるお母さん。そこで安心して伸びています。今にきくと、ああよかったと思うときがきますよ」(57頁)。

ある日、一介が息を切らせて教室に飛び込んで来て、ちょっとでも早く笠原に聞いてほしいとばかりに、ねこをもらった話を一気に話した。ねこの名前や家での様子など、ひとしきり話した後、一介はランドセルからノートを取り出して、「詩、書いてきた。お母さんの分もあるよ」と言って見せた。

ねこの目	一介
ぼくが	ねこの目をみたら
ぼくが	うつっている
ぼくの目には	ねこがうつっている。
ねこのめんたまは	
	ラグビーボールみたいな目だった。(58頁)

ニャンコ	美恵子(母)
彼は秋の風といっしょに	
宝物のようにわが家にやってきた	
なかなかハンサムで	
かしこそうなニャンコ	
不安そうにニャンニャンなっている	

わが息子といえは
夢ではなからうかとホッペをつねりまくり
「やーめんこい」
「やあめんこい」

と機関銃のように連発

絵本をめくる心で

ほほえんでみている私です。(58-59頁)

一介のお母さんが、笠原の言ったことを受け止め、「一介の喜びとともに喜び、いい聞き役」として「絵本をめくる心で」我が子を見守っていることがわかる。笠原も、「『絵本をめくる心』。そうなんだ。この心がゆとりであり、発達を見守る心なんだ」と絶賛し、「教室の子どもたちの日々織りなす物語を『絵本をめくる心』で見たいものだと思った。／失敗も、つまづきも、ゆれ動く心も『かくあるべし』と指導の対象として見るよりも、育ち行く姿の一つとして眺めていけば、ゆとりを持って解決できるような気がする」(59頁)と、教師の教育姿勢の問題として「発達を見守る心」の大切さを受け止めている。

このように、一介は、親からも教師からも見守られて、安心してその良さを伸びやかに発揮して、成長していくのである。

4) どんどん書くように

2年生になり、「クラス全体が書いたり読んだりを楽しむ雰囲気の中で」、一介は、どんどん書くようになり、学級物語にその作品はたびたび登場するようになった。毎日が感動の連続のようで、「子どもの世界を思う存分楽しんでいる」様子が作品に表現された。

「花、咲くときに音がするぞ」

と一介。

「まっさか」

と耕二。

「あっ、それするかも知れない。オレ、テレビで見たことある」

ともの知り博士の泰成(60頁)。

一介がノートを取り出して、次の詩を見せる。

花のひらく音

朝、六時二十分に、外に出た。

花のつぼみは、どんな音をしてさくかしらべたくて見に行った。

チューリップの花は

ヒラーッと音がしたと思った。

つくしは

グニュとめを出したと思った。

たんぽぽは

ピローッと音がしたと思った。

あさがおの花の音はプワーかな。

もし

ちきゅうじゅうグニャとかポワーンとか

いろいろな音がしたら

夜ねむれなくなるだろうな(60-61頁)

「おまえ、これマジ？」

「じいっと耳つけて聞いたんだぞ」

と一介。本当かなという目の勇一には、

「勇ちゃんも早起きしたらわかるから」

と言った(61頁)。

早起きして、花の開く音を聞いた時、家へ駆け戻って、

「カズ、大ニュースあるよ」

と叫んだ一介。

「また、何か見つけたか」

とたずねるお父さんに、「花の開く音」をひとしきり語ったという。家族中が一介の話を楽しみにしており、「いい聞き役」になっていたのだ。笠原は、「聞いてもらえるから次々と発見が続き、感覚が磨かれていく」(62頁)と述べている。

また、笠原は、「ゆったりと耳を傾けてもらえる体験の中で育つ子は、人の作品や話に対する反応もまた素直である」として、学級物語に掲載された仲間の詩を見て、「これはすごい。これは本当だ」とほめまくり、何度も繰り返し読む一介の様子も紹介している(62-63頁)。

次の「ちょうちょ」の詩の一節には、今年初めてのちょうちょの発見の喜びを一介親子で共有する会話が再現されている(64頁)。

ことしはじめてみたちょうちょでした。

大いそぎでうちにかえって

「おかあさん、ちょうちょがとんでいたよ」

としらせました。おかあさんは

「ちょうちょ、あったかいからでてきたんだね」といいました。

ぼくは「うん」といいました。

一介が次々と作品を作り、それが毎日のように学級物語で紹介されるので、クラスの仲間も、保護者も楽しみにするようになった。お母さんはもう「みんなと同じにさせたい」とは言わなくなった(69頁)。

一介のネコ、チャタローのお母さんがいる山本さんが、一介の詩をほめてお母さんに語りかけた。「ちょっと松野さん。英才教育してんのかい」「どうして」「だって、あの一介の詩、うちの子なんかとっても真似できないしさ。今じゃ、私は毎日楽しみだからさ」「山本さん、うちの子、そのチャタローになりたがっているのよ。この間だなんか、机に向かって一生懸命何かやっているから、いいぞ勉強だ。そう思っただけでぞき込んだらさ、チャタローになりたいってかいてあるんだから。もう、うちの子ったら」「それも詩なんでしょう。そこがすごいって」(69-70頁)。

それが次の詩である。

チャタローになりたい
うちのチャタローはいいなあ。
だってぼくがべんきょうしているとき
かならずねているもん。
ぼくはちゃたろうになりたいです。
ぼくがねこで
ねこがぼくだったらいいです。
ねこの一日はいいなあ。
そとであそんで
ねて
じゆうにできていいなあ。
なんにもしないでのんびりしているもん。(70頁)

「松野さん、何か秘密の特訓でもあるの」
「何も。ただ、聞いてやっているだけ。聞いているうちにだんだん面白くなってきて」
「ああ、それなんだ。面白いと思って聞くのが大事なんだ。だんなさんも協力してかい」
「うちかい。パパは剣道に付き合ったり、朝一緒に何かしているくらい」(71頁)。

お母さんが「いい聞き手」として、一介の話を聞いてやったことが、一介の表現力を開花させた

ことが分かる。

5) お父さんの役割

笠原は、雨の中を急いでいた時、「先生でないかい。ぬれるっしょ。乗っていかないかい。」と一介のお父さんに声をかけられ、車に乗せてもらったことがあった。その際、お父さんは自分の少年時代の話をしてしながら、「もし男の子の親になったら、たくましく育てて男同士の付き合いをしたいと思ったこと」、しかし、今のような世の中ではしつかに迷っていることを話してくれた(71頁)。それからしばらくして、一介が次の詩を書いた。

ごぜん三時

ぼくとおとうさんは朝やけを見た。ならんで見た。
朝、三時におしっこにおきた。
おとうさんが
「一介、朝やけ見るか」
とそとに出た。
そとに行ったら、月が出た。
そのよこに赤くきらきら光っている
金星があった。
きれいだった。
金星はいばっているみたかった。
山のほうから朝やけが出ていた。
地めんも光っていた。
お月さまは半分だった。
そとに五分くらいいた。
小鳥の声がピピピピと
ひくくきこえた。
もう朝かなあと思った。
気もちよかった。
ずうっとうしていたかった。
ぼくはすっきりした。
さむくはないし、あつくもないし
ふつうだった。
人はだれもいなかった。
ぼくとおとうさんだけだった。(72-73頁)

笠原は、何ていい風景だろうと感動して、次のコメントを添えて学級物語で紹介している。

朝やけに向かって立つ父と子。その姿を想像するだけで私にはじんとくるものがある。お父さんも無言。一介くんも黙って空を見ている。早起きの小鳥が、どこかで鳴いている。〈もう朝かな〉そう思いながら、空を見る。山のほうから朝やけが広がり地面も光って見える。なんか、とっても大事なものをお父さんが一介くんに伝えている瞬間のように私には見える。

一介くんと並んでいるだけでお父さんは幸せ。そしてお父さんのそばに立っているだけで一介くんは心満ちている。「ぼくはずっとこうしていたかった」私は、とてもいいものを見た。そんな思いで、この文を書いている。「ぼくとおとうさんだけだった」二人に流れる温かいもの。お父さんはこうして一介君を育てている。(73-74頁)

笠原は、黙って朝やけを見るこの父子の姿を、「見事な教育ではないか」(74頁)と述べている。

数日後、お母さんに会って、笠原は、お父さんの反応を聞いている。

「先生、この間、一介の詩が学級物語に載ったとき、パパは仕事から帰ってきて、ニヤニヤして読んでるの。それも何回も何回も。そして、オレもまんざらじゃないなですって。あれから夜、晩酌の度に一介、あれ持ってこいと言ってはながめてるの。パパったら」(75頁)。

そして、親の、「かけがいのない我が子」への思いを感じている。

このような親子の関わりが学級物語で紹介されることで、他の親にも親子の関わり方を見直すきっかけになると思われる。笠原は、「勉強ができる、できない」というような「学校的価値観」とは異なる、子育てにおける大切なものをクラスの保護者に伝えているのだ。

6) 笠原の失敗と反省

子どもの心に寄り添い、共感しながら接している笠原でも、「課題に沿ってしつなくてとは思っ」子どもを見てしまうと、大きな間違いをすることがあった。学級物語に掲載した一介への謝罪文である。

先生は一介くんにあやまらなければならないこれは運動会前の話です。そのころ、練習で教

室を出たり入ったりすることも多く、何となく子どもたちも落ち着きをなくしかけていました。よそ見をしたり、落とし物が増えたりが気になっていたころのことです。

私が見たのは一介くんが友だちの筆箱をけ飛ばした瞬間でした。

「拾っておいで。そしてあやまりなさい」かなりきつい口調で私は言ったのです。一介くんは口をつぐんで、その場に立ったままでした。私は続けたのです。

「筆箱が泣いているよ。それに、自分の筆箱をけ飛ばされた人が、どんなにくやしいかわかるかい」

一介くんは黙って下を向いていました。私はまた、続けました。

「鉛筆にも、消しゴムにも、ものには生命がある。け飛ばしていいかどうかわかるでしょう。もし、口があったら、やめて、やめてくれと言っているよ。拾っていらっしやい」

そう言ったとき、拾ってきたのは近くにいた子でした。

「そんなに黙っているなら、悪かったと思うまで立っていなさい」

本心、私は早くあやまってくれればいいと思っていました。あやまりに来てよと願ってさえました。ですから、しばらくして「ごめんなさい」と一介くんが来てくれたときは、ほっとしました。

「もうするんじゃないよ。気がつけばいいんだから」

私は、やさしく言いました。一介くんはこくとうなずいて席につきました。翌日の一介くんの日記に私ははっとして申しわけない気持ちでいっぱいになりました。

* * *

ぼくはたたされた 一介
きょうたたされた。
しんぴんのくつ下をはいていったら、前はほめられたのに、きょうはおこられた日になった。このくつ下、ききめないのかなあとと思った。ぼくは、足がいたくておれるほどたたされた。クラスみんなにはずかしかった。ぼくは、びくとも動けなかった。

ぼくは、ゆうきくんのケシゴムをひろってやったのに、ゆうきくんが「じゃまするな」といった。だから、ぼくがおこった。ふでばこを地面においてけとばした。

したら、先生におこられてたたされた。(76-78頁)

翌日の一介の日記を読んで、前回のようほめてもらおうと、新品の靴下をはいてきていた一介の思いを知って、それに気付かず、また、トラブルの経緯も確かめず、頭ごなしにしかってしまっただ自分を反省している。失敗の原因は、ゆるみだしたクラスの秩序を立て直さなければならないという思いから、子どもたちを自分の枠にはめよう、しつけようという考えに囚われてしまったことだった。そのために子どものトラブルを大きな視野で、ゆとりを持って見ることができなくなったのだと思われる。

7) 本好きの子に成長

笠原が、学級懇談会や学級物語などを通じて、子育てをめぐる保護者との交流を図っていたためであると思われるが、お母さんたちから、お誕生会のプレゼントに、教室に行って本の読み聞かせをしたいと申し出があり、PTA 学級委員の望のお母さんを中心に始められていた。子どもたちは、次は何を読んでくれるのだろうかとワクワクして待つようになり、子どもたちを本好きにしていた。家庭でも、「ご飯の後で、本読んで」と子どもがねだるようになり、お母さんたちは、読む本を探すために本屋や図書館に行くようになったという(79頁)。

「元気に外を飛び回り、自然の野や山や川の絵本を体で吸収していた」一介は、夜、お母さんに本を読んでもらうことも大好きで、笠原に、「先生。昨日、お母さんね、ぼくに本を読んでもらうとき、泣いていたんだよ……ぼくも泣いちゃった」(79頁)などと話してくれた。

自分でもいろいろ本を読むようになり、お父さんと一緒に読むこともあったようで、笠原に次のように語っている。

「カズね。灰谷健次郎が好きなんだよ。お母さんも好きなんだよ。それからね。宮川ひろという人も

好きなんだ。この間、お父さんと一緒に宮川ひろという人の『おとうさんにかんぱい』を読んだら、お父さんね、カズ大きくなったらパパと酒飲むべと言ったんだよ」

一年生の冬、一介は次のような感想文を書いている。

おとうさんにかんぱい

おとうさんがこの本をみつけてくれたとき、ぼくはびっくりした。だって、ひょうしのえがぼくのかおそっくりだもん。それに、おとうさんのかおだってまるでぼくのおとうさんそっくりだった。つよそうで、男らしくみえたよ。よんでいったらまたびっくり、おふろあがってピールがたのしみなところ。としもおんなじ三十八さい。そして、しごとしんけんなところ。とってもにた。ぼくはこの本が気に入ってしまった。だからこの本を三かいてもよんだ。ぼくがこの本をよんだとき、おかあさんが、

「一介、ふゆやすみのじゆうけんきゅう、カッターでえんぴつけずるのにしなさい」

といったとき、ぼくはこりゃあこまったとおもった。だって圭太くんとおんなじで、ぼくはナイフをつかうのがとくいじゃないもん。ぼくはふゆやすみちゆうなんでもおこられた。あんまりうまくけずれないからやる気をなくしたら、

「男はさいごまでがんばるもんだ。けずっているうちにじょうずになるんだ」

と、おとうさんにいわれた。

ぼくは、おっかないとおもいながら、がんばった。そしたら、ぼくのけずったじゅんにはりつけてひょうほんみたいにしてくれて、

「やっとできたかな」

と、ぼくのあたまにおとうさんの大きい手をのっけていった。

圭太くんも「えんぴつけずるめいじん」といわれているけど、ぼくも先生が「じょうずだね」とほめてくれたとき、がんばってよかったとおもったよ。

ぼくのおとうさんはおっかないけど、しごとをがんばるところがすきだ。トラックで、しょくりょうひんを、おろしてくるしごとだ。大きいにもつをもつとき「力がある」と、いつていた。ぼくがみたとき、いっぺんににもつを二こ

もっていた。「男はカモチでないぞ、はたらけないぞ」とわらっていた。ぼくのおとうさんのうではきんにくもりもりで、圭太くんのおとうさんみたいだよ。ぼくは、圭太くんのおとうさんもすきだ。カモチだもん。

ぼくのおとうさんは、よる六じごろはなをまっかにしてかえってきて、

「ああ、はらへった。まだごはんでないか」という。おとうさんのこうぶつはさしみだから、おふろのあとで、さしみをたべながらビールをのむ。おとうさんはビールをのみながら、いいきげんになってくると、

「一介。男はつよくなれ。なんでもがんばる子になれ。きょうは、けんどうがんばったか」

とか、

「おとうさんがしごとにいっているあいだ、おかあさんをまもれよ」

とかいう。ぼくは、みんなのことをまもってくれるおとうさんが大すきだ。だからぼくは、おかあさんのしんぶんはいたつを、おそわれないようにまもっている。おとうさんはときどき、「一介、大きくなったら、おとうさんとおさけのむべな」

と、目をほそくしていう。ぼくはおとなになったら、おとうさんぐらいきんにくもりもりになっておとうさんと、かんぱいするんだ。(81-83頁)

一介とお父さんの父子関係がよく描かれ、お父さんにあこがれ、お父さんのようになりたいと願う一介の気持ちが素直に表現されている。これが市の感想文コンクールで特選になった時、お父さんは次のような寝言を言ったという。

おとうさんのねごと

きょうおとうさんがねごとをいいました。

「一介。えらい、よくがんばったぞ」

といいました。

もういっかいききたいとおもったら、もうしゃべっていないので、がっかり。またきいてみたいです。「一介。えらい、よくがんばったぞ」といったとき、うれしくて、やっぱりぼくのおとうさんだとおもいました。(84頁)

2年生になってますます本好きになっていった一介は、灰谷健次郎の『マコチン』を読んで書い

た感想文が北海道知事賞に選ばれ、灰谷先生からサイン入りの本を送ってもらっている。お母さんは、この時、

「一介には一介のよさがあったのですね。素直に自分を出し、わかってもらえ、書くことが好きになり、一介は宝物を持って三年生になります。私もいっぱい一介に教えられました」と笠原に語っている。笠原は、『みんなと同じにしたい』と不安いっばいに語るお母さんに、『そうですね。しつけは集団生活を営む上で大切なことの一つですから、ある程度は、落ち着かなくては』などと言っていたら、一介はこんな輝きを私たちに見せてはくれなかつたらう(92頁)と、自分の判断が正しかったことを確認している。

8) 心の痛みに共感できる子に

二年生の終わりの三月、六年生とのお別れ集会である事件が起こり、一介は目を真っ赤にして泣いた。

集会の最後の「大きな古時計」の全校合唱で、司会者が「それでは、みんなで『大きな古時計』を歌いましょう」と言い終わった時、まだピアノ伴奏が始まらない時に、一人の子どもが大きな声で歌い始めた。一瞬のざわめきの後、笑い声が起こり、二年生も周りに同調して笑った。

激しい泣き声が出て、会場は静まった。障害を持った五年生のAちゃんが、その歌を担当に制止され、叱られていた。笠原は、「自分が責められているようで苦しかった」(85頁)と述べている。笠原は、教室に戻って、子どもたちに、

「少し難しいかもしれないけれど、先生は、今から大事なことを話すから聞いてちょうだい」と言って、子どもたちが一年生の時、四年生のAちゃんをばかにした子がいた時、Aちゃんのことを詳しく話して聞かせたことを思い起こさせ、語りかけた。

「Aちゃんはね。小さいとき、病気になって、時々周りの人と一緒のことができないことがある。周りの人と違うやり方で気持ちを伝えることもある。みんなだって友だちと違う言い方することがあるでしょう。」

でもね、Aちゃんは、学校が好きなんだ。友だちがいる学校が好きなんだ。だから元気に学校に来て、みんなと一緒に楽しそうにしているんだよ。

だから、だれが教えてくれたのか知らないけれど、Aちゃんの気持ちも考えないでからかったり、ばかにしたりしてはいけないの。それにAちゃんは五年生。みんなより年上のお姉さんなんだよって。先生がそう言ったことがあるでしょう」(86頁)

「今日の集会で、Aちゃんはみんなより早く大きい声で歌ったね。きっと、この歌知っているから元気よく歌おうと思ったんだよ。六年生に歌ってあげたかったんだよ。みんな、あの歌、そんなにおかしかった」(86頁)

「これは先生たちもいけなかったとおもうんだけど、もし、この学校の子の心が育っていたら、Aちゃんが歌ったとき、ああAちゃんも歌ってると思って一緒に歌ったと思うよ。笑ったりしなかったと思う。先生たちもAちゃんの気持ちに気が付かないで、Aちゃんを泣かせてしまった。先生はとっても悲しかった。ずうっと前、灰谷健次郎さんの『だれもしらない』という本を読んであげたときもAちゃんのお話したね。みんなにAちゃんの気持ちのわかる子になって欲しいと思って今お話しています。ねえ、みんな。みんなと同じことをしなければ、ばかにされたり、笑われたりしなければならないの」(87頁)

「この学校に千二百五十人います。みんな一人ひとり違う子なの。……いろんな子が集まって来ているのが学校なの。……みんなだって、人と違ったことをしてばかにされたり、笑われたりするより、わかってもらえて、包んでもらえたら、ああよかった、ここにいて。やっぱり自分はみんなと一緒に仲間だって思うじゃない。先生はこの学校の生徒にそういう子になって欲しいと思っています。心が育つということは、いろんな人がいることをわかっていくことなんだよ」(87-88頁)

「Aちゃんのお母さんは、Aちゃんのこと、とっても大事なんだ。大事な大事な子どもなんだよ。いい子に育てて欲しいといつも思っているの。お母さんが子どもを生むとき、こんな子いないなんて思う親は一人もいない。お母さんとお父さんの生命を分けてもらって生まれてくる子は、宝ものなんだよ。みんなも、どの人もお父さんやお母さんは、いい子にしたい学校に通わせているんだよ。そういう願いを持って学校に集まっているみんなは、一人ひとりみんな違っていいんだよ。これからみんなが大きくなっていくとき、いろん

な人に出会うでしょう。そのとき、どの人も一生懸命生きていることを知って欲しいです。この二年間、先生と一緒に勉強してきたことを全部忘れてもいい。笠原先生のことを忘れてしまってもいい。でも、今日のお話だけは覚えていて欲しいと思って、少し難しかったけど、先生は一生懸命話しました」(88頁)

笠原の話聞いて、一介は、目を真っ赤にしていたという(88頁)。

笠原は、この出来事を学級物語にも書いて家庭へ持たせている。一介は、学級物語をお父さんに読んでもらって、話し合っている。翌日の日記に父子の会話が次のように書かれていた。

……(略) 夜、おとうさんと先生の書いた『ゆめ』の文を読んだ。お父さんは読んでいるうちになきそうだった。そしてさすがのお父さんもタオルで顔をふいた。それからお父さんは、こういう話をしてくれた。

お父さんは「むかし、ふたごだったからすごく小さかったんだよ。学校へ行ったら<もやし>とか<らっきょう>とかいっていじめられてつらかった。だからおとうさんは、いじめられるのがいやだからみんなにいじわるをしない」といった。ぼくはみんながわらっているとき、わらわないでその人のとなりについてぼくもならんでおもいきりうたいたくなかった。ぼくは、ばかにする人はきらいだ。ぼくは先生の話を書いたとき、Aちゃんがいっしょうめんめいうたっているのにどうしてみんなわらったんだと思った。「わらうな」と、どなりたくなかった。ぼくは、いじめられている人を見ると、すぐたすけてやりたい。ぼくは今、この日記を書いているときもなけてきそうだ。ぼくは、この二年間で先生がいないところをはじめて見ました。(89頁)

笠原は、これを読んで、「一介のやさしい心は、Aちゃんの心の痛みにも共感できるお父さんやお母さんから伝えられていた。忙しい仕事を終えた後に、一日の出来事に耳を傾けてくれ、一緒に笑ったり泣いたりしてくれる家族の中で、ものを思うということがゆったりとできる子に成長していた」(89頁)と述べている。

灰谷健次郎先生からサイン入りの本をもらった

一介は、お礼の手紙を書いているが、その中でもこの事件のことを次のように書いている。

先生はやさしくて楽しいけど友だちをばかにする人にはすごいおこって

「このクラスから出ていきなさい」

という。先生はおこるときまじめにおこります。

この間のことだけど六年生のおわかれ集会があって、そのとき、全校で歌を歌いました。五年生にびょう気でみんなと同じようにできない人がいて、まだ歌うときではないのに一人で大きい声で歌いだして、全校のみんながわらいました。

あとで教室に帰って先生は

「大じな話があるからすわりなさい」

と、しんけんな顔をしていました。そして、

「一年生のとき、四年生のAちゃんをバカにしたとき、先生はみんなに話をしてあげたけど、

Aちゃんは小さい時びょう気になって、ときどきみんなと同じことができないことがあるんだよ。でも、Aちゃんは、学校がすきじゃないか。友だちがいる学校がすきじゃないか」

とおこられました。先生は少し声を大きくして、

「そしたら、みんなと同じじゃない人や、やせっぽちの人や、みんなよりとても太っている人は学校にきたらだめなのかい」

とおこられました。先生はなっていました。

「みんなには、まだむずかしいかもしれないけれど、心がゆたかになるということは、いろんな人がいることがわかっていくことなんだよ」

といった。ぼくは先生のなっているところを、この二年間ではじめてみました。

灰谷先生は、こういう時どうしますか。やっぱりおこりますか。(94-95頁)

一介は、笠原の思いをしっかり受け止めることのできるやさしい、心豊かな子どもに育っていることが分かる。一介は、灰谷健次郎先生から「そのやさしい心を大事に大きくなってください」というお返事をもらい、自分の生き方の支えにしているようだという(95頁)。

以上のように、一介の場合は、最初はやや乱暴なところがあり、「問題行動の子」ととられかね

ない型破りの子どもだったが、笠原が、「あの元気はエネルギーですよ。そして明るさがいい。素直なのもいい。教室中の子をみんな好いているみたいですよ。どの子にもスキンシップしていますよ……一介くんは、人間も草も木も生きものも、みんな好きなんだろうなあと思いますよ。きっと愛しまれて育てられてきたんでしょね。みんな仲間だと思っているんですよ」(36-37頁)と、その個性を積極的に評価し、その良さを、学校秩序の枠にはめてつぶすようなことをせず、大切に、良き理解者になったこと、そして、親にもそのことを分かってもらい、親にも子どもの良き理解者になってもらったことによって、一介の良さが開花していったのであった。また、学級物語を通じて伝えられる一介の良さは、仲間やその保護者からも理解され、評価されるようになっていったのである。教師が子どもをどう見て取るか、子どもの見方の重要性を示す実践事例である。

(次号につづく)

註

- 1) 広瀬 信「笠原紀久恵の教育実践記録の研究 (1-1) ——『友がいて ぼくがある——学び合い、育ち合う40人の学級物語』の検討」『富山大学人間発達科学部紀要』第6巻第1号, 2011年, 1-20頁; 広瀬 信「笠原紀久恵の教育実践記録の研究 (1-2) ——『友がいて ぼくがある——学び合い、育ち合う40人の学級物語』の検討」『富山大学人間発達科学部紀要』第6巻第2号, 2012年, 41-62頁。
- 2) 筆者のメールでの問い合わせに対して、笠原は、「確かにあの頃の竹内常一、坂本光男さんなどの本はぜひぶん読みました。だから影響を受けているところもあるかとは思いますが、全生研路線にはなじめないものを感じておりました」と述べて、「全生研的にやっていたのではない」という認識を示している。
- 3) 笠原紀久恵『友がいて ぼくがある——学び合い、育ちあう40人の学級物語』一光社, 1981年, 269頁。
- 4) 同上書, 269頁。
- 5) 笠原紀久恵「子どもたちのくれる宝物」, 宇田川宏, 伊藤篤, 高橋智編『教職への招待』ミネル

ヴァ書房, 1994年, 9頁。筆者の問い合わせに、笠原は、この「親の言葉も、きっかけとなったというよりは、常にそんな風を感じ、思っていたことが、『やっぱりそうなんだよね』と思ったということだと思うのです」と述べている。

6) 同上書, 10頁。

7) 同上書, 10-11頁。

8) 筆者の問い合わせに、笠原は、「目の前の子どもが時代の流れの中で変わったから、教育方法を変えたという意識はないのです。『子どもは伸びていく生命体』ですから、教育方法も、その子、その状況に応じて変わるのだと思うのです」、「初めから全生研的にやっていたのではないので、私の中ではやめたというふうではないのです。自然の流れとおもうのです」と述べている。

9) 同上書, 11頁。

10) 同上書, 11頁。

11) 同上書, 25頁。

12) 臨床心理学者の高垣忠一郎は、「遠くから、あるいはそばに一緒にいて、おとながじっと見守ってくれる。じゃまされないで、見守られて、自分がしたいことができ、しかもそれが許されるという安心感のなかで、子どもは自分と世界を確かめながら、自分のペースで主体性をそだてていく」と述べて、子どもたちの成長に必要な「守りの枠」として、「見守られているという安心感をもたらす『枠』」の重要性を指摘している。そして、「自分が見守ってもらえている」という安心感が、「自分が自分であって大丈夫」という自己肯定感を子どもに持たせ、この自己肯定感が持てれば、子どもは「自分の頭で考え、自分の心で感じたことに依拠して、自分の人生を選んでいくことができる」としている(高垣忠一郎『生きることと自己肯定感』新日本出版社, 2004年, 53, 59, 63頁)。

13) 「教室のニュースを子どもたちがランドセルに詰めて運んでいく。……私は、子どもたちのランドセルを、教室や学校の土産を毎日運ぶランドセルにしたいと思う」(25-26頁)という表現で、毎日発行していることを示唆している。

14) 筆者の問い合わせに、笠原は、「『友がいて…』は高学年、『先生が好き…』は低・中学年の事の日々というのもあるかと思うのです。私はいつも『中学年は小学校時代の青春時代』と書いていま

すから、この時こそ、『初めに集団ありき』ではいけないと思っています」と述べている。

(2012年5月17日受付)

(2012年7月18日受理)

